



笠松の偉人

かい せん じょう き

快川 紹喜 国師は笠松町門間の出身!

◆◆ シリーズ⑥ ◆◆

「心頭滅却すれば、火も自ずから涼し!」

笠松町史によると、快川和尚は土岐氏の代官北門間道家佐京進の三男だということです。また、恵林寺略史によれば、生まれたのは1501年(文亀元年)です。

「国師」という称号は、快川和尚の徳を慕って、門下に入る者が数千人に達したことを知った正親町天皇が、その威徳を讃えて与えました。つまり国師とは朝廷から人の師となり、手本となる高僧に贈られる最高の称号です。

快川和尚は、武田信玄に招かれて恵林寺に入りました。信玄の旗の「風林火山」の文字は快川和尚が書いたといわれています。長篠の戦いで織田、徳川の連合軍に敗れてから武田家は衰退の一途をたどります。快川和尚は武田家が織田に滅亡されてから1ヶ月後、信長に追われていた大和淡路守など3名を恵林寺にかくまい、引き渡しにも

応じませんでした。怒った信長は、快川和尚を恵林寺の山門に100名ほどの僧侶と共に追い上げました。そして山門に火を付けました。燃えさかる炎の中で和尚が「心頭滅却すれば火も自ずから涼し」という言葉を残したのはあまりにも有名な話です。「信念に従い、何事にも毅然とした態度で臨む」快川和尚の姿は、多くの人のあこがれであり、この逸話が長い間語り継がれてきた理由だと思われます。

なお、門間にある「弘済禅寺」は快川和尚が生まれた場所に創建されたと伝えられています。



門間にある弘済禅寺

かきまつの民話「昔むかし」

まといの松太郎②

印^{しるし}絆^{ばてん}天^{てん}、もも引^{ひき}、頭^{ずきん}布^ふ、胸^{むね}当^{あて}をつけ、窓^{まど}から見れば、たしか、新^{しん}町^{まち}、綿^{わた}屋^や佐^さ蔵^{ぞう}あたりがぼつと赤い。綿^{わた}屋^や佐^さ蔵^{ぞう}の娘^{むすめ}、梅^{うめ}を松^{まつ}太^た郎^{ろう}はすきであつたからすぐわかつた。

「火^か事^じだあー。火^か事^じだあー。」

と叫^{さけ}びながら、固^{かた}く雨^{あま}戸^どの閉^しめられた町^{まち}並^{なみ}を走る。凍^こるよ^うに冷^{つめ}たい。伊^い吹^{ふき}おろしであつた。

「い^あかん、こ^あの雨^{かぜ}風^{かぜ}は大^{おほ}事^{ごと}だ。」

「佐^さ蔵^{ぞう}の奴^{やつ}、火^かの始^{はじ}末^{まつ}ぐらいできんのか。火^か事^じだあー。大^{おほ}火^か事^じになるぞお。」

走^{はし}った。とにかく走^{はし}った。重^{おも}いま^いま^いを持^もって走^{はし}る松^{まつ}太^た郎^{ろう}の頭^{かぶ}の上^{うへ}でリ^りン、リ^りンと、ま^まとい^いにつ^ついた鈴^{すず}(虫^{むし})がな^なつた。

「この鈴^{すず}虫^{むし}は代^{だい}官^{かん}よりい^いた^ただいたも^もの。幕^{まく}府^ふ所^{しよ}在^{ざい}の火^ひ消^けし組^{ぐみ}のみに許^{ゆる}されたもんや。陣^{じん}屋^や三^{さん}組^{ぐみ}の誇^{ほこ}りだからな。」

と^お思^{おも}うと、足^{あし}の痛^{いた}さも寒^{さむ}さもな^なかつた。

走^{はし}るうちにも、西^{せい}の方^{かた}がしだいに赤^{あか}くな^なつてい^いく。

「バ^ばカヤロウ、ば^ばや^やするな。」

上^{かみ}本^{ほん}町^{まち}の四^よつ辻^{つじ}で鉄^{てつ}組^{ぐみ}の源^{げん}太^たにど^どな^なれた。す^すま^まじ^じい勢^{いき}いでか^かけてい^いった源^{げん}太^たの背^せの「鉄^{てつ}組^{ぐみ}」と染^そめ抜^ぬか^かれた字^じが見^みえな^なくな^なつた。

「ち^ちくし^しよう、ま^また、あ^あの鳶^{とび}の源^{げん}太^たに先^{さき}をこ^こされ^れたか。」

秋^{あき}井^いの松^{まつ}太^た郎^{ろう}と鉄^{てつ}組^{ぐみ}の源^{げん}太^たとは日^ひ頃^{ころ}はよ^よく気^きがあ^あつた。

つづく

